

## 認知症介護実践者研修シラバス

科目名	認知症ケアの基本的視点と理念	研修形態と講義時間： 講義・演習（180分）
目的	高齢者施策における認知症ケアの方向性と位置づけを理解し、個人の尊厳を重視する認知症ケアの理念の構築を促す。	
到達目標	1. 高齢者施策における認知症ケアの方向性を理解し、認知症介護実践者研修で学ぶ範囲と研修修了後の人物像のイメージが明確になる。 2. 認知症ケアの歴史的変遷を理解したうえで、個人の尊厳を重視する認知症ケアの理念を構築できる。	
概要	1970年～80年代の管理的ケアやその後続いた施設中心のケア、そして現在の個人の尊厳を重視するケアまでの歴史的変遷や、制度の変遷を理解したうえで、受講生が現場で展開している現状のケアの質の向上に関する基本的な視点を学ぶことを目指す。具体的には、再度認知症ケアの理念を構築したうえで、本研修における自己の目標設定につなげる。	
内 容		備 考
1. 高齢者施策と認知症認知症介護研修等の位置づけ	高齢者や認知症施策の方向性と現状を理解した上で、人材育成の必要性やその方法を示す認知症介護実践研修の全体像を理解する。 1) 地域包括ケアシステムにおける認知症ケア 2) 認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）と認知症介護実践者等養成事業 3) 認知症介護実践者研修の位置づけ	・オリエンテーションも兼ねて本研修の位置づけを解説する。
2. 認知症ケアの歴史的変遷	これまでの認知症ケアの歴史的経緯や変遷を踏まえて今後の求められるケアのあり方について理解する。 1) 認知症ケアの歴史的変遷 1970、1980、1990年代から現在まで 2) 目指すべき認知症ケアの方向性	・過去の資料や写真等を用いて理解を深める。
3. 認知症ケアの理念構築	認知症ケアを実践する上での理念構築を行い、それを実践するための具体的な方法を検討し現状を振り返る。 1) 認知症ケアの理念構築 2) 安全の保障と尊厳の保障 3) 質の高いケアの理解 4) 問題行動から行動・心理症状（BPSD）への変遷	・グループ演習において理念を構築する。
4. パーソン・センタード・ケアの理解	パーソン・センタード・ケアの考え方とその展開方法の具体的な事例を交えながら理解を深める。 1) パーソン・センタード・ケアの基本的な理解 2) パーソン・センタード・ケアと自身のケアの評価	
5. 自己課題の設定	これまでの自分自身のケアと本科目の演習で構築した理念を対照し認知症介護実践者研修における自己課題を設定する。	・演習の結果をもとに自分自身の研修課題を設定する。

科目名	認知症ケアの倫理	研修形態と講義時間： 講義・演習（60分）
目的	認知症ケアの倫理の理念や原則を理解し、日常的なケア場面での倫理的課題と本人や家族の意思決定や意思表示の判断の根拠を踏まえ、支援のあり方について理解を深める。	
到達目標	1. 認知症ケアの倫理や倫理原則を理解し説明できる。 2. 日常的なケア場面での倫理的課題と本人の意思決定や意思表示の根拠を説明できる。	
概要	専門職による認知症ケアの実践場面においては、尊厳の保障と安全や健康管理において倫理観を問われる場面が多い。本科目では、まずケアの倫理、それに付随する倫理観の形成や検討に必要な諸理論を学び、具体的な介護場面を題材に、本人や家族の同意、意思決定や意思表示の判断の根拠、そしてそれらを補完するための方法について学ぶ。	
	<b>内 容</b>	<b>備 考</b>
1. 認知症ケアの倫理の理念と、理解のための基本的知識	認知症ケアの場面における介護職員に求められる倫理的な判断の場面を整理し、解決方法の考え方を理解する。 1) 認知症ケアの倫理の必要性 2) 人間の尊厳と認知症ケア 3) 生活の質（QOL）と生命の尊厳の理解 4) 倫理的判断の理解	・具体的なケア場面の事例を用い倫理的な判断を考える機会とする。
2. 倫理原則	4つの倫理原則の考え方について事例を通して理解する。 1) 倫理原則の考え方 2) 倫理4原則の理解（自律尊重原則、善行原則、無危害原則、公正・平等原則）	
3. 日常ケアにおける倫理的諸問題	日常的な介護場面で生じる、コミュニケーション場面や家族関係を例に挙げ倫理的視点で検討する。 1) 認知症ケアにおける真実告知 2) 家族介護者の役割とその意義 3) 代理判断の考え方 4) 行動コントロールの倫理 5) 認知症の人の医療同意の問題	
4. 倫理的に適切なケアの実践	講義・演習内容を総括し認知症ケアにおける適切なケアや目指すべきケアとは何かを理解する。 1) 自立と自律への支援 2) パーソン・センタード・ケアと倫理	

科目名	認知症の人の理解と対応	研修形態と講義時間： 講義・演習（180分）
目的	加齢に伴う心身の変化、疾病、認知症の原因疾患、中核症状、心理的特徴を理解した上で、行動・心理症状（B P S D）の発生要因と実践場面での対応を理解し、認知症ケアの実践につなげる。	
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 加齢に伴う健康上の変化や高齢期に見られる疾患、心理状況について理解できる。</li> <li>2. 認知症の原因疾患やステージごとの支援のあり方について理解できる。</li> <li>3. 認知症の中核症状と心理的特徴を理解した上で、行動・心理症状（B P S D）の出現要因と対応の基本を理解し、実践場面で活かすことができる。</li> </ol>	
概要	介護現場において行動・心理症状（B P S D）への対応を検討する以前に、認知症の人を理解した上で、原因となる疾患やステージごとの状態、そして中核症状への適切な対応を行うことが求められる。本科目では、原因疾患の理解と中核症状の医学的、症候学的、心理学的理解など認知症の人を多角的に理解した上で具体的な対応を検討し実践につなげることを目指す。	
内 容		備 考
1. 認知症に関する基本的知識	<p>加齢に伴う感覚機能も含めた心身の変化、認知症の医学的な理解や診断について若年性認知症も含めて具体的かつ詳細に理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 加齢に伴う身体・心理状態の変化</li> <li>2) 加齢と認知症の影響（M C I、若年性認知症）</li> <li>3) 認知症に間違えられやすい状態、疾患</li> <li>4) 認知症の原因疾患</li> <li>5) 認知症の診断基準</li> <li>6) 認知症の重症度の評価</li> <li>7) 認知症の薬物療法</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症の医学的な観点を含めて理解を深める。</li> <li>・D S M - I V、D S M - Vなどの解説も交えて診断方法から認知症の症状の理解を深める。</li> </ul>
2. 認知症の中核症状と心理	<p>原因疾患別にみた中核症状や、心理学的な視点も踏まえて理解を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 中核症状の具体的理解と対応</li> <li>2) 原因疾患別の症状の理解と対応</li> <li>3) ステージごとの特徴と支援</li> <li>4) 認知症の症状を悪化させる要因</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行動・心理症状（B P S D）に注目する以前に、中核症状の症候を理解し、心理的側面に対する支援の重要性を理解する。</li> </ul>
3. 認知症の行動・心理症状（B P S D）	<p>行動・心理症状（B P S D）の出現の軽減をめざし中核症状に対する具体的なアプローチや考え方を理解する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 行動・心理症状（B P S D）の出現原因の理解</li> <li>2) 行動・心理症状（B P S D）の対応の基本</li> <li>3) 行動・心理症状（B P S D）の対応方法例の検討</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な事例を用いて認知症の人の心理的な状況を理解し、行動・心理症状（B P S D）の対応のあり方を検討する。</li> </ul>

科目名	認知症の人の家族への支援方法	研修形態と講義時間： 講義・演習（90分）
目的	在宅で介護する家族支援を実践する上で、その家族の置かれている状況や介護負担の要因を理解し、必要な支援方法が展開できる。	
到達目標	1. 在宅で介護する家族の置かれている状況を理解できる。 2. 家族の介護負担の要因を理解し必要な支援方法が展開できる。 3. 介護保険施設・事業所の職員としての家族支援の役割を理解できる。	
概要	可能な限り住み慣れた地域で認知症の人が生活を継続するためには、介護する家族の支援は欠かせない。本科目では、介護保険施設・事業所の職員として、必要な視点を理解し、多角的かつ具体的な支援方法について実践できるようになることを目指す。	
内 容		備 考
1. 家族介護者の理解	在宅で介護する家族の状況を理解し、社会的な背景を踏まえて実践者が家族に求められている課題を明確にし必要な支援方法を明らかにする。 1) 家族と介護（家族によるケア） 2) 高齢者世帯や在宅介護の実態 3) 在宅で介護する家族を取り巻く課題	・国民生活基礎調査の結果などをもとに解説 ・歴史的背景とケア論としての在宅介護
2. 家族介護者の心理	介護者の介護負担感を客観的に評価し、それに伴う弊害を理解した上で具体的な支援方法やその心構えを理解する。 1) 家族介護者の介護負担の実態と評価 2) 家族の介護負担の軽減に向けた専門職の役割 3) 認知症の人を介護する家族の心理	・男性介護者、夫婦、嫁、親子等性別や続柄からの視点も含める。
3. 家族介護者の支援方法	入所サービス、在宅介護サービスそれぞれの家族支援の方法を体験的に理解する。 1) 介護保険施設・事業所の家族支援の役割 2) 家族支援のための具体的方法	・演習により自分自身の役割を自覚する。

科目名	認知症の人の権利擁護	研修形態と講義時間： 講義・演習（120分）
目的	権利擁護の観点から、認知症の人にとって適切なケアを理解し、自分自身の現状のケアを見直すとともに、身体拘束や高齢者虐待の防止の意識を深める。	
到達目標	1. 認知症の人の権利擁護に必要な基本的知識を修得する。 2. 介護サービスにおいて職員が担う権利擁護の役割について理解できる。 3. 介護サービスにおける高齢者虐待や違法な身体拘束等の権利侵害行為を防止する具体的な取組みについて理解できる。	
概要	ケアの質を維持・向上させることによって認知症の人の生活の質を確保することは、介護サービスにおける権利擁護の実践であるといえる。個々の職員はその役割を十分に認識する必要がある。本科目では、認知症の人の権利擁護に必要な基本的知識を修得するとともに、受講者が権利擁護の観点から現在のケアの質を振り返り、介護サービスによる具体的な権利擁護の方法として、高齢者虐待や身体拘束、不適切なケアの防止の取組みについて学ぶことを目指す。	
	内 容	備 考
1. 権利擁護の基本的知識	介護サービスにおける認知症の人の人権や権利とその擁護、および職員の役割について理解を深める。 1) 認知症の人の人権・権利とその擁護のための職員の役割 2) 介護保険法や関連法規と権利擁護 3) 認知症の人の権利擁護に資する制度（成年後見制度等）	
2. 権利侵害行為として的高齢者虐待と身体拘束	高齢者虐待防止法の概要を理解した上で、身体拘束との関係を含む概念、背景を含む実態を理解する。 1) 高齢者虐待防止法の概要 2) 養介護施設従事者等による高齢者虐待 3) 養護者における高齢者虐待	・特に2)については、受講者間での具体例の検討や講師からの提示等により理解を深める。
3. 不適切なケアと権利侵害の防止	不適切なケアと権利侵害行為（虐待等）との関係について理解を深める。 1) 介護サービスにおける権利侵害行為の捉え方と防止の考え方 2) 介護サービスにおける権利擁護の到達目標	・それぞれについて、演習等により受講者自身のケアを振り返る場面を設ける。
4. 権利擁護のための具体的な取組み	介護サービスにおける権利侵害行為の発生の背景を理解し具体的な対策を立てることができる。 1) 介護サービスにおける権利侵害行為の防止のための具体的な方策 2) 事業所内で必要な体制 3) 虐待等の事例が発生した場合の対応方法	・グループワーク等による事例演習を行い、具体的に理解する。

科目名	認知症の人の生活環境づくり	研修形態と講義時間： 講義・演習（120分）
目的	住まいの様式、介護者の関わり方など認知症の人を取り巻く生活環境の構築や改善のための評価方法や調整方法を修得する。	
到達目標	1. 認知症の人にとっての環境の重要性を理解し、環境調整に向けた介護者の役割が理解できる。 2. 認知症の人の状態を理解し、それに合わせた環境づくりができる。 3. 環境の改善のための評価方法やその方法を実践できる。	
概要	介護現場では、認知症の人に及ぼす影響が理解され回廊型からユニット型、個室型へと物理的な環境の変化が見られている。しかし、安全の保障と本人の自律意思の尊重の両方を実現するためには、施設・事業所全体の取組みが求められる。本科目では、環境を物理的、社会的、運営面それぞれの要素から再度検討し、認知症の人の生活と職員の役割を明確化した上で介護現場において実践できる能力を修得することを目指す。	
	内 容	備 考
1. 認知症の人と環境の基本的知識	認知症の人にとっての環境の配慮の重要性を歴史的背景や認知機能の障害も踏まえて理解を深める。 1) 認知症の人と生活環境 2) 環境と行動・心理症状（B P S D） 3) 認知症ケアにおける住環境の歴史の変遷	・施策における施設環境の変遷を理解する。 ・加齢の影響が及ぼす環境適応
2. 認知症の人への環境支援とその方法	環境的支援の考え方について理解を深め、具体的な方法を理解する。 1) 環境の工夫による代償的支援の方法 2) 対人交流の促進 3) 介護職員の役割 4) 地域資源の活用	・各施設・事業所別の職員の役割を理解する。 ・人的環境の影響について理解する。
3. 環境の評価と改善のための具体的な取組み	環境の改善を行うため、現状の施設・事業所等の環境の評価方法を理解し、課題を解決するための方法を修得する。 1) 環境改善のための評価視点 2) 環境改善のための具体的方法	・事例を用いて環境変化によるリスク、無機質な環境や、煩雑な状況によるリスクを検討し、解決策を見出す。
4. 環境のリスクマネジメント	環境への不適応や認知症の症状によるリスクを明らかにし具体的な対応方法を修得する。 1) 生活場面での転倒、誤飲、外出などのリスクと解決に向けた具体的方法 2) 環境づくりと安全の確保 3) チームケアによる環境づくりと展開	

科目名	地域資源の理解とケアへの活用	研修形態と講義時間： 講義・演習（120分）
目的	関係職種、団体との連携による地域づくりやネットワークづくり等を通じて、既存の地域資源の活用や認知症の人の暮らしを支える地域資源の開発の提案ができる。	
到達目標	1. 認知症の人にとっての地域資源の意味と介護職員の役割を理解できる。 2. インフォーマルな地域資源をケアに活用したり、提案や展開ができる。 3. フォーマルな地域資源を理解し、ケアに活用できる。 4. 各種地域資源を活用し地域生活や施設生活を護りその質を高めることができる。	
概要	認知症の人が自立的に生活するためには、介護職員等が地域資源を理解し、ケアに活かしながらその人の望む生活の質を高めていくことが求められる。しかし、認知症や施設での生活などによって社会との関係が希薄になると、これまでとは大きく異なる生活になってしまったり、地域社会で孤立したりすることが懸念される。本科目では、施設ケアや在宅ケアにおいて、地域社会や関係職種、団体との連携による地域づくりやネットワークづくり等の学びを通じ、既存の地域資源をケアに活用したり、認知症の人の暮らしを支える地域資源の提案や展開、協働の方法を学ぶ。	
	内 容	備 考
1. 認知症の人にとっての地域資源と実践者の役割	地域資源の考え方を理解し、認知症の人が地域で生活をしていく上で必要な地域資源の機能や連携方法について理解する。 1) 「地域」の考え方 2) 地域包括ケアシステムと認知症ケア 3) 地域にある「資源」 4) 認知症の人の地域生活とリスク 5) 実践者の地域での役割	・地域の定義を明確にする。 ・在宅生活と施設生活の違いを考慮し理解する。
2. インフォーマルな地域資源の活用	地域のインフォーマルな地域資源の活用方法と展開について学ぶ。 1) 地域住民の認知症への理解 2) 施設・事業所での家族会の役割とその効果 3) インフォーマルな地域資源の活用の具体的方法	
3. フォーマルな地域資源の活用	既存の認知症施策に関連する各種サービス、システムを具体的な活用方法も含めて理解を深める。 1) 認知症施策の理解と連携 2) 介護保険以外の公的サービスの活用	・一人暮らし高齢者への支援、セルフネグレクト状態の高齢者への支援等を多職種連携の視点で検討する。
4. 地域資源としての施設・事業所	施設や事業所等における地域連携の事例、地域資源の開発事例をもとに活用方法の理解を深める。	

科目名	認知症の人とのコミュニケーションの理解と方法	研修形態と講義時間： 講義・演習（120分）
目的	認知症の人とのコミュニケーションの基本的知識を理解し、中核症状の特徴や進行に応じたコミュニケーション方法を身につける。	
到達目標	1. コミュニケーションの原則が理解できる。 2. 認知症の人の中核症状の特徴や進行に応じたコミュニケーション方法を修得し実践できる。	
概要	認知症の人への対応については、本人の性格やこれまでの生活、認知機能の低下の影響等を理解したかかわり方が求められる。本科目では、高齢者とのコミュニケーションの基礎や原則を理解した上で、認知症の中核症状がもたらす様々な困難さを軽減することを意識したコミュニケーションの具体的方法を修得することを目指す。	
	内 容	備 考
1. 認知症の人とのコミュニケーションの基本的知識	加齢の影響と認知症の影響を踏まえたコミュニケーションの意義と原則を理解し適切な方法を選択できる。 1) 高齢者全般のコミュニケーションの特徴 2) 認知症の人の心理とコミュニケーションの意味 3) 認知症ケアにおけるコミュニケーション	・信頼関係の構築等人として共通部分の理解 ・加齢の影響 ・認知機能の低下の影響 ・認知症の影響を整理し、体験を交えながら理解する。
2. 認知症の人とのコミュニケーションの場面と支援方法	認知症の人とのコミュニケーションの方法について具体的に展開するための基本的知識を理解する。 1) 高齢者とのコミュニケーション 2) 認知症の人のコミュニケーションの困難さと支援方法 3) 認知症の人の心理と支援の基本的考え方	
3. 認知症の人とのコミュニケーションの具体的方法	認知症の人とのコミュニケーションの具体的方法について演習を通して体験的に理解する。 1) 言語障害のある人とのコミュニケーション 2) 記憶障害のある人とのコミュニケーション 3) 見当識障害のある人とのコミュニケーション 4) 実行機能障害のある人とのコミュニケーション等の中からいくつかを選択しグループワークにて演習を行う。	・演習は、心理的な理解、加齢の影響、認知機能、健康、環境等多角的な分析を加えて、望ましい対応方法を導き出すようにする。



科目名	認知症の人への非薬物的介入	研修形態と講義時間：	講義・演習（120分）
目的	非薬物的介入やアクティビティプログラムなどの支援の取組みを認識しつつ、認知症の人の心理的安定や生活の質を向上するための活動についての理解を深めること。		
到達目標	1. 認知症の人の心理的安定や生活の質を向上するための活動を理解できる。 2. 生活の中で行なわれる非薬物的介入やアクティビティプログラムを理解し実践できる。		
概要	認知症の人の記憶や症状の特徴を意識した働きかけはこれまで現場で実践されている。本科目では、認知症の人への情動的側面や生活の質の向上に一定の効果が認められている非薬物的介入やアクティビティを中心に紹介し、生活の中で実施する上での具体的な方法や評価方法について理解を深める。		
	内 容		備 考
1. 認知症の人へのアクティビティの考え方	認知症の人へのアクティビティの意味や生活への影響について理解を深める。		
2. 認知症の非薬物的介入の基本	認知症の人それぞれに相応しいアクティビティを選択し、その効果を引き出すための非薬物的介入について理解を深める。 1) 非薬物的介入の目的と意義 2) 非薬物的介入の分類と方法 3) 認知症の人への非薬物的介入の適用		・非薬物的介入の研究等を基に評価し、その展開方法と限界、留意事項について解説する。
3. 非薬物的介入の実際	非薬物的介入で用いられる代表的な療法やアプローチについて理解を深める。		・実践事例を用いて紹介する。ただし効果について日本神経学会等の関係学会より文献などを参考にすること。
4. 認知症の人への介入の評価	認知症の人への専門職の介入で得られる生活の質（QOL）の向上や心理的な変化の評価方法等を修得する。 1) 評価の意義 2) アウトカムの考え方 3) 事前評価と事後評価 4) 心理、行動に関する評価		・評価の方法とその信頼性や妥当性検証のポイントを示す。

科目名	認知症の人への介護技術 I (食事・入浴・排泄等)	研修形態と講義時間：講義・演習 (180分)
目的	食事・入浴などの基本的な生活場面において、中核症状の影響を理解した上で、日常生活の安全・安心の向上、健康の維持増進を図りつつ、認知症の人の能力に応じた自立支援の実践ができる。	
到達目標	1. 代表的なケアの場面において認知症の心理学的視点をもとにしたケアが実践できる。 2. 認知症の人のできる部分に注目し自立支援を目指したケアが実践できる。 3. 安全、安心、健康の維持増進を図ることを支援できる。	
概要	認知症の人の日常生活を支えるためには、食事、入浴、排泄等の基本的な活動のケアが適切に行われることが求められる。そのためには、中核症状からもたらされる生活の中の困難さを深く理解し対応できる技術が必要である。本科目では、事例や生活場面ごとに中核症状の影響を理解、分析した上で、望ましい対応が実践できる方法を修得する。	
内 容		備 考
1. 認知症の生活障害	認知症の人の生活において、さまざまな中核症状の影響によって困難になる場面を理解する。 1) 記憶障害と日常生活の困難 2) 見当識障害と日常生活の困難 3) 実行機能障害と日常生活の困難 4) 思考力や判断力の障害 5) 身体機能、健康状態の低下と困難	・認知症によってできなくなっていること、分からなくなっていることを理解し、できることは何かを検討する。
2. 認知症の人の食事ケア	食器、配置、食事形態、介助方法等からくる本人の不安や困惑を理解し具体的な介助方法を修得する。 1) 食事の際の困難さや評価方法 2) 介助方法の工夫やポイント	・事例演習で行う。 ・残された機能、できることへの働きかけを考える。
3. 認知症の人の入浴ケア	浴槽、浴室環境、温度、脱衣の際等の本人の不安や恐怖感を理解し具体的な介助方法を修得する。 1) 入浴時の困難さや評価方法 2) 介助方法の工夫やポイント	・それぞれについて事例演習を通して学ぶ。
4. 認知症の人の排泄ケア	場所、便意、便器の使用、オムツの違和感等を理解し具体的な介助方法を修得する。 1) 排泄の困難さや評価 2) 介助方法の工夫やポイント	

科目名	認知症の人への介護技術Ⅱ（行動・心理症状）	研修形態と講義時間：講義・演習（180分）
目的	認知症の人の行動の背景を理解した上で、認知症の行動・心理症状（BPSD）に対してチームで生活の質が高められるような支援方法を修得する。	
到達目標	1. 認知症の人の行動の背景を読み取りケアを展開することができる。 2. 認知症の行動・心理症状（BPSD）に対してチームで対応できる。 3. 認知症の行動・心理症状（BPSD）に対して生活の質を高める方法で解決ができる。	
概要	認知症の人が生活の中で生じる困難さへの適切な対応ができない場合、生活歴や心理的側面、環境適応や健康状態の管理等の発生要因を分析し理解した上で対応が求められる。本科目においては、行動・心理症状（BPSD）への表面的な対応ではなく、その背景を理解した上で、介護現場で有効な解決方法を修得する。	
	内 容	備 考
1. 行動・心理症状（BPSD）の基本的理解	認知症の行動・心理症状（BPSD）の出現要因となる様々な背景やそのメカニズムについて理解を深める。 1) 行動・心理症状（BPSD）の発生機序 2) 原因疾患別の行動・心理症状（BPSD）の対応	・認知症の行動・心理症状（BPSD）については国際老年精神医学会の定義を元にする。
2. 行動・心理症状（BPSD）への介護技術	認知症の行動・心理症状（BPSD）の簡単な事例の出現背景を検証し、チームケアによる生活の質の向上を目指した対応のポイントを導き出す。 1) 基本的な介護技術 食事、入浴、排泄介助等の拒否場面の事例 2) 主な症状への介護方法 興奮・暴力・暴言、帰宅の要求などについて 3) 認知症の行動・心理症状（BPSD）への介護の評価視点	・事例演習はグループで行う。 ・事例演習を通じて、背景、要因、対応、評価などをまとめる。

科目名	アセスメントとケアの実践の基本Ⅰ	研修形態と講義時間： 講義・演習(240分)
目的	認知症の人の身体要因、心理要因、認知症の中核症状の要因のアセスメントを行い、具体的なニーズを把握することができるようアセスメントの基本的視点を理解する。	
到達目標	1. 支援過程における認知症の人のアセスメントの基本的視点が理解できる。 2. 認知症の人の生活、身体要因、心理要因、認知症の中核症状の要因のアセスメントを客観的に行うことができる。 3. アセスメント項目から本人の具体的なニーズを抽出することができる。	
概要	認知症の人の生活全般を支援するためのケアの実践が展開されるためには、その人の主観的な部分を理解し多角的な視点でアセスメントが行われた上でケアの実践が行われる必要がある。本科目では、ケアの実践の根拠となるアセスメントの基本的視点を理解し、本人の具体的なニーズの抽出方法を修得する。	
	<b>内 容</b>	<b>備 考</b>
1. 認知症の人のアセスメントの基本的知識	施設や事業所職員が、認知症ケアを行う上で身に着けておきたいアセスメントの基礎的な考え方や既存のアセスメントツールの活用や選択方法など修得する。 1) 認知症の人のアセスメントの考え方 2) アセスメントの基本的な視点	・認知症の人のアセスメントの必要性について解説 ・現在介護現場で使用されている各種アセスメントツールの特徴を紹介する(在宅版含) 例：センター方式、MDS、MDS-HC、三団体方式、R4、インターライ等
2. 観察の方法とポイント	認知症の人の生活を支援するために観察方法や聞き取り、記録方法を修得する。 1) 認知症の人の背景を知るための観察の視点 2) 観察と聞き取り技法 3) 記録方法	・演習は、グループワークで実施し展開する。 ・モデル事例を提示し、背景を知るための観察視点、聞き取り技法、記録方法などの方法についてグループワークで検討する等の方法を用いる。
3. アセスメントの実際	アセスメントの実際を体験的に理解する。施設・在宅の別はなく認知症の人の1事例を基にアセスメントを行い課題抽出を行う。	・ニーズ抽出を行う演習を行う。必要な情報をいかにして現場で抽出するかを考える(例：各領域ごとに優先順位を付ける等)。

科目名	アセスメントとケアの実践の基本Ⅱ（事例演習）	研修形態と講義時間：講義・演習（180分）
目的	アセスメントを踏まえた目標の設定と、目標を実現するためのケアの実践に関する計画の作成・立案ができる。チームでケアの実践に関する計画の評価やカンファレンスを行うことができる。	
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 認知症の人の目指すべき生活像を捉え、それに向けた目標を設定することができる。</li> <li>2. アセスメントを踏まえたケアの実践に関する計画（以下「実践計画」という。）を作成・立案することができる。</li> <li>3. 実践計画を展開しチームで評価することができる。</li> <li>4. 実践計画に対してのカンファレンスを行うことができる。</li> </ol>	
概要	認知症の人の生活全体を捉え、望ましい生活像を理解した上で、認知症の人へのケアが展開されるための実践計画を作成できることを目指す。自施設実習で対象となる認知症の人を想定し実践計画の作成を行う上で基礎と展開、評価方法について演習を通して学ぶ。	
<b>内 容</b>		
1. 実践計画の作成の基本的知識	対象者個人の背景や生活歴、そして認知症の症状のアセスメントを行い、抽出された課題を実践計画に展開するための方法を学ぶ。 1) 目指すべき生活像と目標設定の考え方の確認 2) アセスメント項目のニーズ分析から、具体的な計画作成に繋げるための方法	・これまでの研修内容を踏まえて、計画作成の方向性を定める。
2. 実践計画の作成の展開	アセスメントを踏まえて、実際のケアを想定した計画を立案するプロセスを体験的に学ぶ。アセスメントシートに記入された事例を用いて計画を作成する。	・ケアの実践計画のシートは講師が準備する。 ・アセスメントを行った事例と同様の事例を用いてグループでカンファレンスを行う。 ・計画作成はグループ毎に演習で行う。
3. 実践計画の評価とカンファレンス	演習で作成した実践計画をもとにグループワークにて評価を行い再度アセスメントを行う視点を学ぶ。 1) 事例演習で作成したケアの実践計画をもとにしたケースカンファレンス 2) 再度アセスメントを行う視点 3) 実践計画の評価方法	・グループで作成した実践計画について、報告後に再度グループ内にて評価を行う。

科目名	自施設における実習の課題設定	研修形態と講義時間：講義・演習（240分）
目的	認知症の人が望む生活の実現に向けて適切なアセスメントを通じた課題と目標を明確にし、ケアの実践に関する計画を作成する。	
到達目標	1. 研修で学んだ内容を生かして、現状のケアを評価することができる。 2. 自施設の所属部署等に良い影響を及ぼす実践計画の作成ができる。 3. 認知症の人の望む生活像をアセスメントし課題と目標を明確にすることができる。	
概要	認知症介護実践者研修の講義・演習で修得した知識、技術を実践するためには、現状のケアの評価をした上で、課題を見出し、改善のための計画を立てて取り組む必要がある。本科目では、自施設研修に向けて、対象者を定め現状の課題分析を行い、その行動計画を立てることを目指す。	
	内 容	備 考
1. 自施設研修のねらい	実践者研修における自施設実習の意義やねらいを理解する。 1) 自施設研修の意義 2) 自施設研修の全体像の理解	・受講生は、事前課題として自施設実習の対象者を、2事例程度事前に準備する。
2. 対象者選定	事前課題として準備された自施設実習の対象者について、これまでの研修内容を参考にアセスメントを行い理解を深める。 1) 対象者の選定 2) アセスメントを通じた課題の抽出	・持参した課題事例についてアセスメントを個人で行いグループで発表し相互に助言を行う。
3. 課題設定	選定した対象者の課題について自施設実習で取り組む方向性を定める。 1) 取り組みの方向性の整理 2) 自施設実習の課題決定	・持参した課題事例の目指すべき生活像を個人で検討する。
4. 計画作成	自施設実習の4週間の行動計画を作成する。 1) 再度アセスメントする項目の検討 2) 実践計画の作成	・4週間の行動計画を個人で作成しグループで報告する。自職場に帰ってから再度アセスメントが必要な点を整理する。

科目名	自施設実習（アセスメントとケアの実践） 研修形態と講義時間：実習（4週間）	
目的	研修で学んだ内容を生かして、認知症の人や家族のニーズを明らかにするためのアセスメントができる。アセスメントの内容をもとに、認知症の人の生活支援に関する目標設定、ケアの実践に関する計画やケアの実践を展開できる。	
到達目標	1. 研修で学んだ内容を生かして、認知症の人や家族のニーズをアセスメントできる。 2. 認知症の人の生活の質の向上を目的にした実践計画を遂行できる。 3. 実践計画をもとに各職場の理解を得ながら、認知症の人の生活支援に関する実践が展開できる。	
概要	本科目は、課題となる事例に対し研修中に学んだ事項をもとにアセスメントを行い、実践計画を実施する過程である。実習は認知症の人の生活の質の向上に寄与する計画を立て、それに基づいた詳細な記録と評価を行う。	
	<b>内 容</b>	<b>備 考</b>
1. 実習の準備	職場内で実践計画の理解を得るため説明を行い、倫理上の配慮を徹底し実習に向けた準備をする。	・実習中の記録はすべてとること。
2. 実習の開始	実践計画に基づき計画的に実施する。 1 週目：再度のアセスメントを実施、実践計画の作成 2 週目：計画に基づき実践(中間報告) 3 週目：計画に基づき実践（計画評価） 4 週目：実践内容の整理・評価、報告資料の作成	・中間報告の頻度や方法は、研修実施主体の状況に応じて実施する。
3. 実習の終了	4 週間の成果を評価し報告の準備を行う。	

科目名	自施設実習評価	研修形態と講義時間：講義・演習（180分）
目的	アセスメントやケアの実践に関する計画の実施結果を整理した上で、客観的に評価、分析し今後の課題を明確にすることができる。	
到達目標	1. 実施した実践計画を整理し他者に伝えることができる。 2. 認知症の人にとって有益な実践計画であったか客観的に評価し助言することができる。 3. 結果を分析し今後の課題を明確にすることができる。	
概要	本科目は、自施設実習で実施した実践計画の実施結果を文章等でまとめ、それについてグループ発表後、相互評価を行う。そこで得られた助言や指導をもとに今後のケアの実践に対する課題を明確にする。	
内 容		備 考
1. 自施設実習報告	実践計画について自己評価をし報告を行う。 1) 目的、方法、結果、考察、今後の課題 2) 報告についてグループでの質疑応答 3) 受講生間の相互評価並びに指導者からの助言	・要介護度の変化や認知機能の評価のみにならないよう生活の質に関する評価を行う。 ・6名程度のグループ報告を行い指導者が司会進行を行う。
2. 実践計画の評価	報告内容の相互評価並びに指導者からの助言をもとに、実践計画を見直し修正し、今後の課題を明確にする。	・相互評価、指導者からの助言を受けて修正ポイントを個人ワークで修正する。
3. 自施設への報告	自施設研修と今後の取組み課題について整理し自施設で報告する。	